

四天王寺国際仏教大学 人文社会学部

『日本語日本文化論叢 埴生野』第二号抜刷 二〇〇三年三月

猪熊信男と恩頼堂文庫について

須原祥二



# 猪熊信男と恩頼堂文庫について

須原祥二

はじめに

本年（二〇〇三年）三月の『四天王寺国際仏教大学蔵所恩頼堂文庫分類目録』の公刊とあわせて、同文庫の公開が始まることとなる。本文庫は大正・昭和期に古文獻の蒐集と研究で活躍した猪熊信男（一八八二〜一九六三）の蔵書恩頼堂文庫の一部を、彼の死後、四天王寺女子大学（四天王寺国際仏教大学の前身）が直接猪熊家から購入したもので、室町〜江戸期を中心（一部、奈良・平安期のもの含む）とする総数約千五百点におよぶ古文書・古典籍群からなる。購入後、一九六九年から三度にわたってその目録を公刊<sup>①</sup>したが、十分な資料整理を伴ったものではなく、閲覧に踏み切ることはできなかった。しかし一九九九年から四天王寺国際仏

教大学の教員有志を中心に研究会を結成した上で、本格的な整理に着手し、このたびようやく公開可能な状態にまでこぎつけた。

恩頼堂文庫は猪熊の晩年から少しずつ売却が始まったが、ある程度まとまった形で所蔵しているのは、彼の生前に古文書一六二点を一括購入した広島大学<sup>②</sup>と本学のみである。今回目録刊行および公開にあたり、調査に関与した者として、猪熊信男について紹介するとともに、かれの蔵書恩頼堂文庫、および本学所蔵分の同文庫全体における位置づけについて、現在の知見についてまとめておくとともに、今回の整理の経緯も併せて記しておきたい。

## 一 讃岐白鳥猪熊家と猪熊信男

本章は、子息猪熊全壽氏<sup>③</sup>、福尾猛一郎氏<sup>④</sup>、松浦正一氏<sup>⑤</sup>らの詳細な紹介に拠りながら、猪熊家の由来と猪熊信男の閲歴を紹介する。

讃岐白鳥の猪熊家は、猪熊信男の代まで白鳥神社<sup>⑥</sup>（香川県大川郡白鳥町字松原）の神主を勤めてきた。日本武尊が死後白鳥となり、伊勢の能褒野から大和の琴引原を経て河内の古市に至ったという伝説は記紀に記されているところだが、社伝では、さらに白鶴となつてこの地に降り立つたのが同社の濫觴とされる。当初は大字白鳥の田中の地にあつたらしく、今も同地にある田中神社は白鳥神社の旧跡で、昔は付近に白鳥陵も伴っていたという（『香川県神社誌』）。現社地の付近には南北朝から室町前期の経幢の一部が残っており、松浦氏はこれを同社と併置されていた鶴内寺の地と推定されている。なお八幡神も合祀され、「鶴内八幡」（「讃岐国絵図」（寛永十年）、「白鳥八幡」（「生駒家分限帳」）とも呼ばれていた。明治二年の神仏分離に伴う調査の際、本殿にあつた神像十五体のうち男女各一体が一木造だったことや、寛文九年に成立した「御領分中宮由来」の「応永

年中安富安芸守時代再興」という記事も近世以前の当社を知る上で参考になる。

白鳥神社が今日の姿に整えられるのは、初代高松藩主松平頼重の保護からである。頼重<sup>⑦</sup>は水戸藩初代藩主頼房の長男に生まれたが、故あつて藩は同母弟の光圀が継承することとなり、常陸下館五万石を経て一六四二年、生駒氏改易の後をうけて讃岐の東半部十二万石に封ぜられた。水戸藩とは以後も兄弟藩として深いつながりを保ちつづけ、頼重の子（後の綱条）は光圀の養子として水戸藩を継承し、光圀の子（後の頼常）は頼重の養子として後嗣に据えられた。その後も水戸藩とは互いに養子縁組みを繰り返しており、結局、頼重の子の頼候の系統が水戸藩を継承し、幕末に斉昭や慶喜らを輩出することとなった。光圀と同じく頼重も文治につとめ、学問を奨励して水戸から岡部拙斎を招聘し、松下見林への出版援助も行なつた。また領内にある崇徳天皇陵を修築した。社寺に対する保護も進め、金比羅大権現（西讃の琴平藩の領内となる）や仏生山法然寺を再興し、それぞれの所領を幕府の朱印地とした。

頼重が西讃の琴平大権現と並び、東讃の白鳥神社の再興保護に着手したのは一六六四年のことである。藩の寄進で現在地に社殿を含めた各施設を新築し、社領一〇〇石の寄

進も行っており、以後、同社は白鳥大神宮と称された。また、翌一六六五年には社領二〇〇石が幕府の朱印地として認められ、將軍の代替わりごとの神主の江戸参府と朱印状の交付が恒例となった。この白鳥神社の神主として京都から招聘されたのが、讃岐白鳥猪熊家の初代猪熊兼古(千倉と号す)だった。

猪熊家は本姓卜部氏で、代々神祇官の官人として朝廷に奉仕してきた。卜部氏は中世になっていくつかの家に分かれたが、鎌倉時代に『釈日本紀』の撰者卜部兼方を輩出した系統は居地(猪熊町)により猪熊の名字を名乗り、『徒然草』の作者吉田兼好や唯一神道の創始者吉田兼俱を輩出した系統は吉田を名乗り、それぞれ猪熊家が平野神社、吉田家が吉田神社の預(あずかり)を継承するようになった。ところが江戸時代の初め、吉田神道の隆盛を背景に平野社預の職を吉田家に奪われた兼古は、単なる神祇官出仕となり、松平頼重の招きに応じて白鳥大神宮の神主を引き受け、神社に隣接する約三千坪の屋敷地を与えられた。神社と同時期に建設されたこの建物の一部(長屋門、表門、母屋)は今日も県文化財猪熊家宅(一九五四年指定)として保存されている。猪熊家は吉田家とならんで「日本紀の家」と呼ばれてもいたが、兼古やその息子兼魚は『大日本史』の編纂に着手した水戸

光圀に史料の提供を行っており、兼古は隠居した頼重への日本書紀の進講も務めた。また光圀は水戸藩内の神主田所出羽と寺門兵部の二人を兼古の弟子として白鳥神社で修行させており、この二人の滞在費は高松松平家から支給されていた。

兼古は普段京都に住み、春秋の祭礼の時のみ白鳥へ赴いていたが、孫の兼慶は白鳥に移り住み、名実ともに讃岐白鳥猪熊家が成立した。白鳥神社の社領は後に寄付も加えて三三〇石に達しており、氏子からの寄進に相撲や芝居興業の運上金、さらに門前町からの莫大な収入も併せた豊かな財力を背景に同家は東讃の名家として繁栄した。現在も同家には高松松平家の分家や徳島蜂須賀家の分家からの興入れに使われた大名かごが残されている。幕末に出た国学者猪熊夏樹は家職を分家に委ね、京都に上り神職や教育職に就き、晩年にはしばしば明治天皇への御進講も行った。業績としては『源氏物語湖月抄』の校注が挙げられる。

猪熊信男は一八八二年五月五日、徳島藩蜂須賀家の分家蜂須賀喜心の三男に生まれた。当時、猪熊家は蜂須賀家の諸家と深い縁戚関係にあり、一八九〇年に没した当主全昌の妻が蜂須賀信濃(徳島藩家老)の娘兆子で、二人の間に生まれた若丸は信男の姉キヨ子を妻に娶っていた。十九才で

全昌の跡を襲った若丸はわずか半年で早逝し（一八九一年）、兆子はキヨ子を徳島に帰して一八九五年に信男を養子に迎えた。信男は高松中学を経て鹿児島第七高等学校（造士館）を一九〇五年に卒業し、京都帝国大学工科大学に進んで電気工学を学んだ。しかし一九〇六年頃から文書・典籍の研究に打ち込むようになり、文科大学教授の三浦周行の薫陶も受けた。工科大学中退後は史料編纂所嘱託や京都府史蹟調査会委員、同府宗教局古社保存計画係嘱託などを務め、古典保存会の設立にも参画した。

一九二四年に京都の東山御文庫の調査を命ぜられると、続いて翌年には宮内省図書寮御用掛を拝命し、普段は京都に在住して調査を行う一方で、上京しての御用も務めるようになった。一九三〇年頃から知遇を得た福尾氏によれば、勤務は非常勤職員のように気楽なもので、昼間は在宅もしくは古書肆めぐりをもつぱらとし、特に京都の佐々木竹包楼には毎日のように通ったという。全壽氏の作成した年譜<sup>7)</sup>の一九二九年の項には、今上天皇御即位大典の儀式について近衛文麿への意見具申の他、京都市史編纂委員会、叡山文庫・西陣織物館顧問、京都仏教各宗学校主催大蔵会委員、大京都振興会委員などの職が列挙されており、古文書・典籍類の研究や収集の傍らで各種公職を務める生活

を送っていたものと考えられる。白鳥神社の社務については分家が継承し、今日に至っている。

一九四一年には職を辞して蔵書とともに白鳥に戻り、屋敷の修理や蔵書整理の傍らで蔵書の展示会開催、新聞雑誌等への寄稿、古文書学講座の開催などの啓蒙活動も行い、香川県文化財専門委員も務めた。七十代半ば頃には耳は遠く眼疾にも悩まされるようになり、一九六三年七月三日、持病の狭心症で逝去した。享年八十一才だった。恩頼堂学人の他に、電影子<sup>8)</sup>、樟園などの雅号も用いた。樟園は詩作（漢詩）の時に用いていたようで、香川県立図書館所蔵の猪熊信男氏関係資料の中には樟園号を用いた漢詩が何点か残されており、『樟園詩抄』<sup>9)</sup>も刊行されている。茶人としても知られており、青蓮院の好文亭、寂光院の孤雲亭、高山寺の遺香亭の撰銘を行い、茶道に関する小文もしばしば寄稿していた。宮中とも深い人脈を持つており、前記の全壽氏作成年譜<sup>10)</sup>によれば、良子女王の東宮妃冊立に関与したところ、貞明皇后に拝謁し御信寵を得たことなどが特記されている。彼が宸翰の蒐集と研究を殊に得意分野としていたこと、そして特に晩年の文章の端々で皇室に対し敬愛の念を表明していることなども、このことと無縁ではないだろう。

## 二 恩頼堂文庫の構成

恩頼堂文庫の名称は『日本書紀』神代上第八段一書第六の大己貴命と少彦名命の天下經營に関する叙述にある「是以百姓至今咸蒙恩頼」という字句に由来する。猪熊自身は「私は人様の恩誼を思う事を以て平成モットーとしている者ですから、私の文庫も恩頼堂文庫と名づけています。恩頼は日本紀にも見ゆる語で、ミタマ(霊)ノフユ(増)と古訓もある位で、大古の日本人の恩の中にも魂があつて、それが生々増ゆるを以て生命としたのです。私はそれを現代にもいかして行きたいと念願する者です。」と説明している。

一九三二年に京都一乗寺の自宅にて「恩頼堂文庫第一回陳列」と銘打つ蔵書の展示会を行っており、卷子・文書等・冊子の三部計五十点の資料が展示目録<sup>③</sup>に掲出されている。そこには後の目録に見える『肥前国風土記』や『感神院外記勸文』(『祇園社勸文』として掲載)、『無明法性合戦状』などの文書・典籍がある一方で、一部異なるものも散見される。その構成内容は後の目録全体と比べるとささやかな感否めないが、宸翰類が一切出ていないこと、第二回以降の開催を企図していることなどから考えて、優品のすべてを展

示したとは考えにくい。この目録から蒐集の進捗を推し量ることは難しいだろう。

讃岐白鳥に帰郷後、蔵書の整理には本格化し、展示会開催の機会も相まって各種の目録が作成されることとなった。一九五三年に香川県の国体開催とそれに伴う天皇の行幸に合わせ、三越高松支店にて宸筆の展示会を開催したが、それに合わせて『歴代天皇宸筆敬展会解説目録』が作成された。そこには猪熊自身の解説文入りで後深草天皇から孝明天皇に至る五十点の宸翰類が掲載されており、編集発行は恩頼堂文庫猪熊信男となっている。続いて一九五四年、第三回香川県名宝展にあわせて『猪熊恩頼堂古書展目録』が作成された。そこには『肥前国風土記』『周書断簡』『神代紀断簡』など古典籍類を中心とした優品二二一点が挙げられており、加えて「特別陳列」として光格から昭和に至る五代の天皇や皇后、皇族の遺品や下賜品、「附属陳列」として讃岐白鳥猪熊家関係の諸資料も載せられている。この頃は特に目録作成作業が急ピッチで進められていたらしく、一九五五年に雑誌に寄せた文章<sup>④</sup>の中には、「目下夜を日に継いで」全書籍目録を編成中で「多忙限りな」い状態である旨が記されている。

そして一九五九年、『恩頼堂蔵書目録略註 附(懸物)宸

翰、御下賜品、考古什器』(以下、『蔵書目録略註』と略称する)が猪熊自身の手によつて刊行された。これは、蔵書の各部門とその下位分類項目を挙げ、項目ごとに簡単な解説を添えたもので、個々の史料名は載せず、項目ごとに代表的史料のみ解説文中で若干触れている。構成は「甲 書棚の部 二八三八一点」「乙 櫃の部 二七六五一点」「丙 本箱の部 三四八四一点」の三部および「古文書 一三六七一点」を挙げ、さらに以下一つの表にまとまつた形で書齋の部(二二九点)、懸物の部(三八点)、宸翰の部(二四四点)、御下賜品(三八点)、考古什器(二五五点)と続く。その総計は三六五七一点と記されている。中核となる「甲」は、洋装本および和本のとりまぜ、「乙」は一部古文書も含む古典籍群、「丙」は和本からなる。岡田温著『日本 文庫めぐり』<sup>66)</sup>には、「一般書二万八千冊、古典籍六千冊、古文書千三百通、宸翰二百五十点、朝廷よりの御下賜品四十点、考古什器三十点あわせて三万六千点」とある<sup>67)</sup>が、一般書は「甲」、古典籍は「乙」および「丙」に該当しよう。これによつて蔵書整理はほぼ完了したものと考えられる。

現在本学には、猪熊家から購入した際に供与された原稿用紙に手書きの目録のコピーが残されている。氏自身の筆とは考えにくい誤字・誤記が見えされること、そして氏自

身が晩年に眼疾(眼底出血)を患つていたことから、既刊の目録もしくは下書きをもとに、身辺の人によつて浄書された可能性も考えられる(以下、これを「猪熊目録」と呼ぶ)。この猪熊目録は、「乙 櫃の部」の表紙から始まり、まず前記『猪熊恩頼堂古書展目録』と全く同じ二二二一点の資料がそのまま通し番号で列挙されている。これらは『蔵書目録略註』の「乙 櫃の部」の冒頭にある「古典籍」と名付けられた一〜五の項目に例示されている史料と一致<sup>68)</sup>する。

また、その項目の解説文に「昭和二十九年十二月、栗林公園に展覧せしもの」ともある。これは香川県名宝展(目録にある開催日程は十二月十八日〜二十五日)を指すと考えて間違いない。したがつて三者は同一の内容を指していることがわかる。

続いて猪熊目録は、表紙様に書されたタイトルごとに、「六」からはじまる各部を列挙する。そのタイトルは以下の通りである。

- 六―七〇一 続古典籍 二四〇点
- 七〇二 草双紙 滑稽本 洒落本 狂詩 狂歌 銅版 一八四点
- 八 勅序本 宮門跡本 画家自筆本 善書板本
- 近代木活本 一八七点

九―十 筆蹟巻物 八九点



- 十一 蔵書印 珍書 近代名家本（親王公卿女官等）  
近代名家本（学者其他） 二二八點
- 十二 肉筆帖 源元寛本 古川躬行本 伏原家本  
冷泉為村卿関係 光甫自筆本 百三十六點
- 十三 近衛家熙本 岡田為恭本 願海阿闍梨本  
渡辺重石丸等本 曆 諸種意見書
- 徳川初期整板本 古板本其一 六五點
- 十四 徳川初期古板其二 四三點
- 十五 徳川時代善本 神道 参考書籍 地図 二〇九點
- 十六 古版画譜 南画譜 一二七點
- 十七 宗淵僧都本 甲・乙・丙・丁・戊・己 一二四點
- 十八 参考資料 一三二點
- 十九 拓本 二五四點
- 二十 入木道古書一、二 新書一、二 一四五點
- 二十一 今出川本 二九點
- （この点数は基本的に巻数、冊数等の数字の総和で算出されている）
- この六く二十一は、『蔵書目録略註』の一く五に続く項目名  
およびその内容とほぼ一致している。以上から、猪熊目録  
は、すなわち「乙 櫃の部」の全目録と結論される。  
右に挙げた「乙」の分類項目は、内容、所蔵者、形態な

ど複数の基準に基づいて順不同に列挙されており、「乙」全体として、はなはだ体系性に欠くものとなっている。その一方、『蔵書目録略註』の「甲」と「丙」はそれぞれ内容に従った分類でほぼ統一されている。「丙」が独立して立てられた理由は判然としないが、その構成や、先に述べた『日本 文庫めぐり』で「乙」と「丙」が古籍として併せられていることから推測すると、「甲」は実際の研究に供する道具で、「丙」は資料自体の保存・鑑賞を主としたものと考えられる（ただし、白鳥神主家代々の重要史料でもある猪熊家玄関日記は「地方史の根本材料たり」として「甲」の末尾に載せる）。以上より、古籍籍からとりわけ貴重なものとして抽出したのが「乙」の一く五の「古籍籍」、それに準じるのが「続古籍籍」で、さらに個々の便宜に従って項目を立てたのが七ノ二く二十一となり、残ったものは内容に従って分類され「丙」にまとめられたということになる。したがって猪熊目録は、恩頼堂文庫のうち、宸翰や古文書その他什器類を除いた重要な資料については、すべて網羅されていると考えてよいだろう。

### 三 四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫について

猪熊の晩年には蔵書の一部の売却がすでに始まっていたが、彼の死後<sup>95</sup>、東京の某有名古書肆が入るなど流出に拍車がかかったようで、一九六六年頃、散逸を惜しむ香川県教育委員関係者から四天王寺の出口常順管長（当時、四天王寺学園理事長、四天王寺女子大学長も兼任）にまとまった形での購入の打診があった。六七年の秋に四年制の四天王寺女子大が開校する経緯もあつて交渉は進捗し、教員の中村直勝、赤松俊秀、田山方南、川岸宏教各氏の間で一部購入候補の検討がなされ、出口管長に健代淵応（常務理事）、塚原亮応（四天王寺本坊）、川岸宏教（助教）の三氏も加わって、実際に白鳥に赴き、購入にあたった。

その後文庫は本学図書館において管理され、一九六九年から三年にわたって『四天王寺女子大学紀要』にその目録<sup>96</sup>が掲載された（以下、これを「旧目録」と呼ぶ。これは猪熊目録のうち、さしあたり現有確認できるもののみについて、その書誌データをそのまま掲げるといふ体裁をとった。加えて図書館の移転に伴う資料の移動で帙や箱から離れたものも多く、一部他の古文書・古典籍とも混合され、目録と資料を対照することすら困難な状態となった。その後図書

館長の富山泰教授が独力で時間を縫って少しづつ整理を進め、ごく一部の資料が紹介・公刊されたが、千数百点にのぼる資料整理の用途はまったく立っていなかった。

一九九九年、白井義則学長を長とする恩頼堂文庫研究会が発足し、公開の前提として悉皆調査と目録の作成、資料の修理、保存のための箱および帙の作成が計画された。当初、教員として田島智子、矢野野隆男、桃尾幸順、源健一郎の各氏が参加した（須原は二〇〇〇年から参加）。当初は旧目録の一三三四点と資料とを一点一点を照合していく作業から始まったが、旧目録が漏らしている資料が何点も見いだされ、対象は一七〇〇点近い猪熊目録全体に広げられた。二〇〇〇年春には大まかな照合作業は終了し、二〇〇〇年夏と二〇〇一年春の休暇を利用して、本学教員のほか関西近辺の研究者有志や大学院の院生の方々に依頼し、一点一点のデータとりと内容にもとづく分類を行った。データ入力では本学学生有志の協力も仰いだ。こうして資料は本来の猪熊目録の順に配列され、修理、箱、帙の作成が進められた。これと並行して教員五人で一部資料の再調査も含めた入力データの修正、猪熊目録との対照表や目次の作成などの作業を進めた。また台帳等の記録や照会から、旧目録掲載資料の何点かについて、四天王寺現蔵となっているこ

とも判明し、二〇〇一年夏、四天王寺の協力を得てこれらの調査も行った。

続いて調査を通して現在のところ得られた本学所蔵の恩頼堂文庫の特徴についてまとめておきたい。恩頼堂文庫の古籍のうち、特に優品だけを精選したのが「乙 櫃の部」の「古典籍一〇五」だが、本学の蔵書でそこに含まれるものは二点（参考書も含めれば三点）のみで、ほとんどは「六」以下に属している。したがって一つ一つは猪熊のコレクションの中で一級品とはいいがたいが、それだけに猪熊信男という蒐集家の嗜好がより大きく反映されている。

とりわけ江戸時代に活躍した天台学僧宗淵（一七八六—一八五九）については相当に入れあげていたようで、彼が関与した刊行物はもちろんのこと、筆蹟をはじめ父母の肖像画まで収集している。目録でも「十七」のすべてを充てており、宗淵や北野学堂関係の資料として一級のものも含まれている。一九四〇年に北野で開催された宗淵上人頌徳展覧会には、自身、大量の展示品<sup>20</sup>を寄せ、展示目録<sup>21</sup>の付録に「宗淵上人略伝」も草している。その際の講演筆記は一九五八年に刊行された『天台学僧宗淵の研究』<sup>22</sup>に収録（附録「北野学僧宗淵上人の学徳を偲びて」）されているが、同書には別に論考も寄せている（「宗淵上人の学問と精神」）。他にも近

世前期に活躍した文化人近衛家熙（一六六七—一七三六）関係の資料もよく収集しており、『塊記』は何種類もの写本・刊本が存している。本学には肉筆はないが、家熙筆の大量の墨帖類も見いだせる。入木道関係の資料も多く、目録では「二十」の一項目を建てているが、中には曼珠院関係の資料も見出せる。本文庫の中では比較的古い、室町期にさかのぼるものも少なくない。

各項目に散在している文書類では賀茂書博士やそれに関わる上賀茂神社関係の資料が多い。また「乙 櫃の部」の末尾に一括されたものとして一連の今出川本（菊亭本）が挙げられる。室町から江戸前期を中心にした故実書・儀式書などの良質な写本が多く、今回新たに、印刷目録から漏れていた分として『扶桑略記』『朝野群載』など何点か加えることができた。

このようにとりわけ優品のみを抜出して編成されたものではないことから、恩頼堂文庫の形成過程に関わる情報も豊富に含まれている。本文庫の刊本には「慶歎」という印が見えされるが、これは猪熊夏樹の父猪熊（卜部）慶歎の印で、本来、猪熊信男の生前から讃岐白鳥猪熊家にあつた蔵書と考えてよい。さしあたり何点が残っている容義塾版の典籍もこれに含まれるようだが、今後、多くの該当書を見

出せそうである。「慶歎」印と併せて「猪熊蔵書之印」が押されているものも何点か確認できる。この印は『近代蔵書印譜』『新編蔵書印譜』（いずれも『日本書誌学大系』）では猪熊信男の蔵書印として紹介されているが、本学所蔵分を見る限り、むしろ慶歎以前の讃岐白鳥猪熊家で用いていた蔵書印の可能性が高い。江戸関係の地図に頻繁に捺されている「猪熊家」印も同様であろう。

おわりに

『四天王寺国際仏教大学所蔵恩頼堂文庫分類目録』の刊行によって、本学所蔵の恩頼堂文庫の学術的調査はようやく入り口にたどりついたといえる。調査担当者も大量の目録取りを優先したため、個々の資料についてはほとんど詳細な検討は加えておらず、「指をくわえて」見送ったものも少なくない。『目録』では限られたスペースの中で、各方面の研究者が目ぼしをつけやすいようなデータを掲出するように心掛けた。また分類目録の他に猪熊目録の配列も掲げ、猪熊信男が目録を編成した段階における情報もできるだけ提供するように心掛けた。この『目録』が本学に調査に來学される諸氏の格好のガイドブックとなることを願ってや

まない。

今回、目録刊行に合わせた恩頼堂文庫の紹介という役割もあつて、十分な調査をつくることができないまま、本稿を成稿せざるを得なかった。今後とも追加・訂正することがあれば、機会を得て報告するように努めたい。ついては、事実誤認や漏らしている資料等あれば、忌憚なきご叱正とご助言を賜りたい。

最後に資料の提供や調査に協力して頂いた各位・各機関に謝意を表して、ひとまず筆を置くこととする。

注(1)「旧恩頼堂文庫目録」(一)～(三)『四天王寺女子大学紀要』一

三、一九六九～七二

(2)『広島大学所蔵猪熊文書』(一)(二)(三)福武書店、一九八二、八三

(3)猪熊全寿「白鳥町と猪熊邸」(夫留佐士)十一、一九八〇、「義公

(徳川光圀)と讃岐白鳥猪熊家」(水戸史学)二四、一九八六

(4)福尾猛一郎「猪熊信男氏の追憶」『日本歴史』二八四、一九六三、

「広島大学文学部所蔵猪熊文書について」(『広島大学文学部紀

要)三一、一九七二

(5)松浦正一「白鳥神社と猪熊家」(『県文化財協会報』、五三)

(6)以下、松平頼重に関する記述は市原輝士・山本大『香川県の歴史』

(山川出版社、一九七二)もあわせて参照した。

- (7) 前掲 (3) 「白鳥町と猪熊邸」
- (8) 本学所蔵の『寛永姓名録』（整理番号八八）には「電影子識語」との書き込みがある。
- (9) 逍遙同好会、一九六〇
- (10) 前掲 (3) 「白鳥町と猪熊邸」
- (11) 「皇室御文庫の名」―東山文庫印に就いて―（「新香川」四七、一九五五）の下にある「細谷君 猪熊生」と題する囲み記事。
- (12) 猪熊信男「恩頼堂文庫第一回陳列」（「互助」二二、一九三三）
- (13) 香川県教育委員会・高松市教育委員会・四国新聞社主催
- (14) 「皇室御文庫の名」―東山文庫印に就いて―（(11)に前掲）
- (15) 出版ニュース社、一九六四
- (16) 福尾猛一郎氏執筆の『国史大辞典』の「猪熊信男所蔵文書」の項には「古文書類千二百余点、宸翰類三百余点、典籍籍類数千冊」との点数が示されている。『広島大学所蔵猪熊文書』（前掲）の挙げる数字もこれと同じ。
- (17) 「探訪調査報告」の「4 香川県資料調査」（新田英治、石上英一、保立道久）（『東京大学史料編纂所報』十四、一九七九）も参照。
- (18) 以下、購入までの経緯については、川岸宏教本学前教授のご教示による。
- (19) 前掲 (1)

(20) 竹内秀雄『天満宮』（吉川弘文館、一九六八）にも掲出された「北野学堂指図届書」（同本で「猪熊信男氏所蔵」とされる）も含む。

(21) 本学所蔵資料にはこの時のタグや展示札と思しきものも伴っている。

(22) 『宗淵上人頌徳展覧会目録』、一九四〇

(23) 真阿宗淵上人鑽仰会編

（すはら しょうじ・本学専任講師）





